

民具資料の活用から見た博物館の役割

岡田 清一*

要 旨

近年、全国の博物館では文化財資料を収集・保存し、展示公開するだけでなく、学校教育に活用することによって、学生及び児童たちに高い教育効果が得られることから「博学連携」傾向が多くみられる。文化財資料のなかで例を挙げると、ひと昔前の日常の生活用具や生業に伴う農具・漁具といった民具資料から先人たちの生活の知恵や工夫を学び、当時の生活様相を知るための教材として活用されている。筆者が勤務する八尾市立歴史民俗資料館においても館蔵民具資料の活用として、展覧会以外に教育現場への出前授業や体験学習といった「博学連携」として積極的に学校教育に取り組んでいる。そうした取り組みを行ってきた結果、文化財資料の調査・研究・収集・保存以外にあたる「資料の活用」の重要な意義を再確認することができた。

キーワード

農業、民具、展覧会、博学連携、体験学習、復原資料

はじめに

私が勤務する八尾市立歴史民俗資料館（以下、当館）は、大阪府八尾市東部の高安山麓に位置する。当地一帯は、高安地域と呼ばれ、都市開発が進む市内平野部に対し、耕作地が多くみられ、八尾市内のなかでも農家軒数が多い地域である。地元の特産物は、花卉・花木、枝豆、若ゴボウといった特産物が周知され、現在も農業が盛んなところである。

当資料館で民俗分野を担当する学芸員であることから、市内の農家の方々から使用されなくなった古い農具資料の寄贈を受けることがある。なかでも高安地域から寄贈された農具は他地域に比べて多い。農具の多くは動力機械が普及する以前の木製農具で、蔵や倉庫の建て替えや取り壊し時に伴って廃棄されるものである。そのなかには紀年名や刻印、製作者、製作地が記されているものもあり、民具を研究するうえで貴重と言える資料も少なくない。

少し余談となるが、私は昭和34年に大阪市住吉区の専業農家に生まれ、4、5歳で物心がつくようになった頃から、農作業を手伝うようになり、毎年、田植えや稲

刈りの時期ともなれば、家族全員（祖父母、両親、兄）が丸丸となって早朝から日が沈むころまで農作業に従事した。そうした環境下で育った私にとって、寄贈される農具には懐かしさや愛着があり、農家の方の話を時間を忘れて聞き入ることもしばしばあった。そこで、寄贈された農具を展示だけではなく、博物館として有効に活用することができないものかと考え、数年前からいくつかの活用事業を実施してきた。本稿では、そうした館蔵資料はじめ復原資料も含めた農具の活用について、展覧会から体験学習に至るまで実施した事業例をいくつか紹介し、それらの成果から博物館の役割について考察する。

1. 展覧会

① 小学校の社会科教材に準じた展示「昔の暮らし」

毎年1月～3月にかけて、市内の小学3年生の児童達が社会科学習「昔の暮らし」に伴い、当館へ見学に訪れる。この期間は社会科学習に合わせて、館蔵民具のなかから電気・ガス・水道がなかったひと昔前の生活道具を展示する。例えば、昔の台所で使われていた羽釜、お櫃、しちりん、消し壺、水瓶、洗たく板、盥といった生活用

*八尾市立歴史民俗資料館

おり、生前に聞いた話によると「15歳ぐらいから肩引き車に乗せて、家から1kmほど離れた水田へ運んで水揚げをした。踏車だけでは倒れてしまうので、木や竹の棒を踏車の左右に立ててそれに掴まって足で踏んだ。夏の日差しの強い日は、左右の棒を高くして横棒を組み、その上に筵を載せて日除けをつくった。」ということである。因みに筆者の実家では、踏車は昭和30年代まで使われていたようで、その後、「バーチカルポンプ」と呼ばれる動力ポンプが使われるようになった。このバーチカルポンプの大きさは径30cm、長さ2m弱の円筒形で、田畑の横を流れる「井路」と呼ばれる農業用水路にこのバーチカルポンプを入れ、動力機とベルトで連結して水を汲み上げるものである。

さて、ミュージアムトークではこの踏車について、見た目だけの解説だけではなく、見学者に十分理解してもらうために当館の玄関先にある人工池で踏車の実演を行った。池の水深は50cmほどで、踏車本体は立てることができたが、人の支えとなる棒については立てることができなかった。そこで2台の脚立を左右に立て、体の一部を館の職員に支えてもらった。事前の練習なしのぶっつけ本番であったが、何とか羽根が回って、水が汲み上げられる様子を見てもらうことができた(写真4)。



写真4. 「踏車」実演の様子

3. 体験学習

現在までの当館の民具を活用した体験学習としては、千歯抜き、カラサオ、底抜け担桶、石臼(挽き臼)がある。

① 千歯抜き体験

既述の企画展「米作りの農具」の期間中、見学に訪れた小学3年生の児童たちに農具体験学習として、「千歯抜き」体験をしてもらった(写真5)。千歯抜きは、木

の台に鉄製の櫛状の歯が水平に突き出ている、櫛状の歯の部分に稲・麦の束を噛ませ、引いて梳き取ると穂から粉が落ちる仕組みになっている。

体験学習では、児童たちの手の大きさ、力加減、体験時間を考慮し、実際の稲束の10分の1ほどのものを各児童に渡して体験してもらった。また、稲を抜き取った際に穂が飛び散って顔や目にあたるので、木枠に透明のビニールシートを張った中に千歯抜き本体を設置して行った。ボランティアさんには、児童が稲束を引いたときに台が動かないように抑えて補助してもらった。児童たちに千歯抜きの構造や仕組みについて口頭で説明するよりも、そもそも「脱穀」とはどういう作業なのか、千歯抜き体験を通して理解してもらうことができた。

因みに千歯抜きは大正時代になると、「足踏み式脱穀機」に取って代わられるようになる。この脱穀機は、逆V字型の針金を埋め込んだ円筒形のドラムを踏み板と歯車をクランクで連結し、踏み板を足で踏み込んで回転させ、そこに稲束を押し当てることによって穂がそぎ落とされる仕組みになっている。その後、ドラムを動力で回転させる「自動脱穀機」へと進展していく。私の実家では、昭和30年代頃まで足踏み式脱穀機を使っていた。私が小学生の頃、父に言われて足踏み式脱穀機を使ったことがあるが、足踏み板の踏み込みと回転がうまく噛み合わず、苦労したことを覚えている。足踏み式脱穀機は館蔵としても保管しており、機会があれば体験学習として児童たちに体験してもらいたいと考えている。

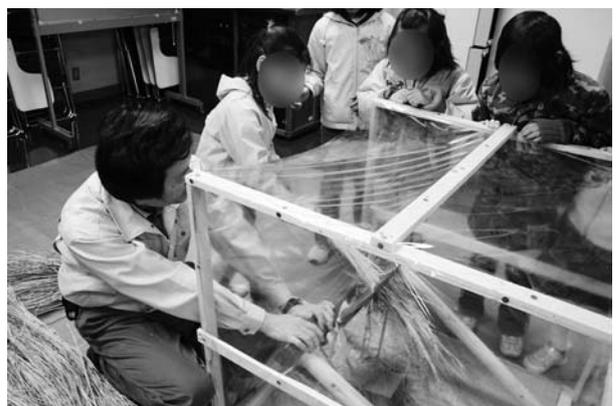


写真5. 千歯抜き体験の様子

② カラサオ体験

平成20年度に文化庁の支援事業として、当館近隣の小学校と連携し、博学協同で育てた大豆で石臼を使って

黄な粉を作る体験学習を行った。本事業は、小学3年生の国語科学習「すがたをかえる大豆」に伴う体験学習である。大豆の栽培は地元の農地所有者から畑を借り、種まきから水遣り、そして収穫するまで児童と協働して行った。

民具体験学習として、栽培した大豆を同校の児童たちに「カラサオ」という昔の農具で脱穀作業をしてもらおうと考えた。カラサオは、長い竹竿、若しくは樫材の棒の先端に回転する短い棒が縄紐や金具で連結されており、長い棒の方を持って、短い棒を回転させながら穀物を叩き、殻を割る。昭和30年代頃まで、近隣の各農家では、庭で菘に広げた穀物を家族全員で向き合いながら脱穀していたことを聞き取っている。

体験当日は、いきなりカラサオ体験させるのではなく、まず、カラサオという農具の原理を知ってもらおうと、玉ねぎ袋に枝付き殻付きの大豆を5束ほど入れ、グループに分かれて短い棒で叩いて脱穀してもらった。最初児童たちは自分たちが何の作業しているのか、口頭での説明だけでは理解できていない様子だった。しかし、棒で叩くことによって、玉ねぎ袋の中の大豆の殻が割れ、中身が出てくることを知り、脱穀の意味を解ってもらった。その後、校庭の一角に菘を敷き、そこへ収穫した殻付きの大豆を児童一人ずつ3回ほどカラサオの棒を振ってもらって、殻を割ってもらった(写真6)。もちろん、児童だけで使用させるのは危険なので、筆者が児童の頭や体にあたらぬように手を添えて補助した。当然のことながら、児童たちは初めての体験なので緊張もあり、体が強張ってはいたが、一度やってみると、カラサオという道具がどんなものなのか口で説明するよりも十分理解できたようだった。



写真6. カラサオで大豆を脱穀する様子

カラサオで脱穀した後、「通し」という丸い竹杵の底に粗い目の金網を張った道具で、児童達に大豆の実と粉々になった殻屑の分別を行ってもらった。金網の目は大豆が網上に残るくらいの大きさで、児童たちが前後左右に振ると、うまく大豆だけが残し、殻屑が下に落ちて民具の活用としてはまずまずの成果であった。

カラサオの体験学習については、少々危険を伴うものであったが、昔の人が実際使っていたものを児童たち自身が使って知ることにより、その農具に込められた当時の人々の知恵と工夫を十分に学ぶことができたと思われる。

② 石臼(挽き臼)体験

カラサオで大豆を脱穀した後日、児童たちに石臼で大豆を挽いて黄な粉づくり体験をしてもらった(写真7)。

大豆は体験前日に館側でフライパンで炒って準備した。当日は、児童たちに学校内の多目的教室に集合してもらい、大豆を材料にした食品にどんなものがあるか(豆腐、味噌、納豆など)「食育」に関することで児童たちと意見交換した後、石臼体験学習についての説明を行った。石臼を使う前に、児童たちに生のものと炒った大豆を5粒ずつ程各自に渡し、色、香り、手触りを比べてもらった。これは、生のものと炒ったものとはどう違うのかを知ってもらうために行ったものである。そして、児童たちが楽しみにしていた石臼で黄な粉づくりの体験をしてもらうこととなった。石臼については、体験1時間ほど前に当館のボランティアの人たちに、上段と下段の石臼の隙間から黄な粉が出てくるようになるまで挽いてもらった。その理由は、最初から行くと黄な粉が出てくるまで時間がかかるからである。児童たちが教室に入って来るや否や、前方に並べた3台の石臼を見た児童たちは、こんな大きな石の塊からどうやって黄な粉ができるのか、不思議な表情をしていた。そして、実際に児童たちの目の前で、炒った大豆を石臼の穴に5粒入れて5、6周ほどぐるぐる回し、石臼の隙間から黄色い粉が出てくるのを見せた。それを見た児童たちから「あっ、黄な粉や!」という歓声の音が上がった。お店で売っている黄な粉しか見たことのない児童たちにとって、大豆から黄な粉ができる様子は驚くべきことであつたに違いない。

そして、児童たちに3台の石臼の前にそれぞれ列を

作って並んでもらい、一人ずつ5粒の大豆を石臼の穴に入れ、5、6周ほど回してもらって黄な粉が出てくるのを確認してもらった。室内は黄な粉の香ばしい香りでいっぱいになった。

体験を終了後、どのような仕組みで大豆が粉になっているのか、石臼の上段を持ち上げて内側の様子を見せられた。幾条にも溝が刻まれていること、穴に入った大豆が石臼を回すことによって中心部から外側へ徐々に砕かれ、粉になっていく様子を理解してもらった。

児童たちが作った黄な粉は担任の先生がビニール袋に入れ、後日、白玉団子を作ってみんなで食べてもらった。その後、児童たちから「おいしかった。」「黄な粉が大豆からつくられるのをはじめて知った。」「石臼は、たいへん重かった。」「お店で売っているものより甘くなかった。」等々の感想文をもらった。



写真7. 千歯扱き体験の様子

4. 民具の復原資料の活用

博物館では、実物の館蔵資料を用いるのではなく、体験学習用として復原資料を用いる場合がある。当館では、河内木綿関係に伴う「綿繰り機」、「糸車」といった体験



写真8. 綿繰り・糸紡ぎ(糸車)体験コーナー

用のキットを数十台所有している。これらは来館者がいつでも体験できるようにコーナーを設け(写真8)、希望者があれば担当学芸員によって指導を行っている。また、学校関係ははじめ教育機関への貸出しも行っている。既述の石臼についても、6台所蔵しており、これらも体験キットとして貸し出しを行っている。八尾市内の小学校の社会科単元、あるいは国語科単元で学習教材として用いられている「綿繰り機」、「糸車」は小学校からの貸出し依頼が多い。また、糸車の扱い方については、教師が事前に研修で訪れるほか、担当学芸員が直接学校へ体験キット持参で出前授業として出向く場合も少なくない。

ここで、当館が館蔵民具の復原資料として製作した「底抜け担桶」について触れてみたい。

2個1対の灌漑用担桶である。江戸時代後期の農学者である大蔵永常によって記された江戸時代の栽培の技術書「綿圃要務」にも掲載されている(図1)。



図1. 綿圃要務に描かれた底抜け担桶

底抜け担桶の構造は普通の担桶とは少し異なり、底に栓の付いた穴があり、栓には長い棒が取り付けられている。井戸や川・池などから水を汲んで入れるときは、栓を閉じて満水にし、畑で水遣りをするときは棒を上げて穴から水を出すという仕組みになっている(写真9)。この桶の復原を市内で唯一、桶屋を営むところをお願いした。

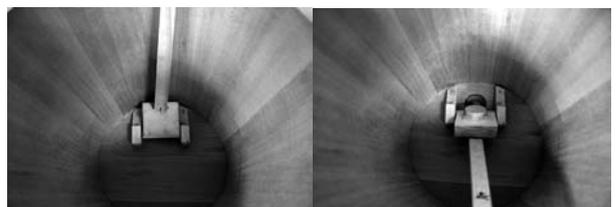


写真9. 底抜け担桶の底内部(栓の開閉状況)

少し余談となるが、お願いした桶屋の方は、館蔵資料の底抜け担桶を製作した職人の子息であることが桶底の外側に押された焼印の屋号で判明した。館蔵資料を調べてみると、他の担い桶にも同じ焼印が押されたものがあることが解った。聞き取りによれば、現在の当主（昭和23年生まれ）が子供のころ、地元の農家の人が水遣りや水肥（下肥）に使う担い桶をよく注文に来ていたということである。

完成した底抜け担桶の復原資料を用い、当館で毎年夏期に行っている「河内木綿 親と子の体験学習」のなかで実際に水遣りをする実演を行った（写真10）。使用場所は、当館が地元の土地所有者からお借りしている畑である。この畑は開館以来、河内木綿研究の一環として綿栽培をしているところである。



写真10. 底抜け担桶（復原資料）の実演

ところで、筆者は小学6年生頃に父に言われて、この底抜け担桶を使ったことがあり、ある程度の自信はあった。しかし、当時からは長い歳月が経っており、当日はかなり苦戦した。水の入った2個の桶をオウコの両端にかけ、畑の畝溝を歩きながら水遣りをするのであるが、歩くと桶が左右に揺れ、撓るオウコとうまくバランスを取らないと、スムーズに水遣りができないのである。底抜け担桶を担う天秤棒あるいは担ぎ棒の名称は、当地域では「オウコ」と呼ばれている。オウコは、ムクノキでできており、弾力性があるがよく撓る。現在でもオウコを使っている農家があるが、農家の人は自分専用の「オウコ」を持っていて、他人の「オウコ」は使いづらいとまで言われた。現在、この底抜け担桶を体験学習の教材として活用することを模索中である。

5. 体験学習用としての寄贈民具の活用

民具資料の扱いについては、後世に伝えるための文化財資料として保存を重視する方向と、博物館資料として保存しつつ活用を考える方向がある。筆者自身の考えとしては、まず、文化財資料の活用として常設展示、特別展示といった展示公開、展示資料としての位置付けを考える。しかし、近年、全国の博物館の事例を見ると、文化財資料のなかでも民具資料については保存し展示公開するだけでなく、体験学習としての活用を積極的に行っているところが少なくない。民具を通して昔の人々の暮らしを知り、民具に込められた知恵と工夫を学び、現在の生活に活かす方向性である。筆者がそのことについて身近に感じるのは、文頭でも紹介した小学児童が学ぶ「昔の暮らし」である。小学校の体験学習に対応するために、これからの博物館は、復原資料だけではなく、実物の収蔵資料を確認・点検し、同種の資料に限って保存用と活用に分けて進めていく必要がある。当館では、寄贈者から「体験学習用」として受け入れている民具がある。数年前、市民の方から不要となった餅つき道具一式を寄贈頂いたことがある。「廃棄するよりは、博物館として活用して頂きたい。」との申し入れを受け、過去に当館で市民団体と連携し、寄贈された餅つき道具を使用して、餅つき大会を開催したことがある（写真11）。子供から大人まで市内外を問わず多くの参加者があった。参加した子供たちのなかには、餅米を蒸し、白に入れて杵で捏ねて搗いて作るということ初めて見る子が多くいた。感想を聞くと、「お餅はスーパーなどでビニール袋にパックされている丸い物や四角い物と思っていた。」ということである。こうした民具の活用は、言い換えると民具資料の「現役復帰」と言え、子供たちの体



写真11. 市民団体と連携した餅つき大会の様子

験学習にうってつけと考える。当館には、他にも市民から体験学習用として寄贈を受けた民具資料があり、今後の活用方法を考えたい。

まとめにかえて

民具資料の活用について、他の古文書や考古資料、また、絵画や彫刻といった美術資料と比べると大きく異なる点がある。古文書は書として読む、美術資料は鑑賞するといったところで、展示ケースの中で展示され、来館者は見ることで理解できる。しかし、民具資料は生活用具であるから、もともとは使うために製作されたものである。従って、展示するだけでは、その資料がどのように使われた道具であるかが理解できないものが多い。特に、今回紹介した米作りの農具がまさしくそうである。そこで、学芸員は来館者に理解してもらうため、解説パネルや写真を駆使して、構造や使い方を説明する。それをもう一歩進めたのが、本稿で紹介した千歯抜き、カラサオ、石臼、底抜け担桶といった民具を実際に使った体験学習である。見るだけでなく、実際に使うことによって理解が深まるのが民具資料と言える。

民具活用として最初に挙げられるのが、今回の文化庁

支援事業で紹介した学校教育への活用ではないだろうか。博物館だけでは至らない部分が学校との連携によってより充実したものになると考える。学芸員は活用資料の選定にあたり、どの学年のどの教科書、どの部分で博物館資料が活用できるかということ把握しなければならない。例えば、「昔のくらし」のなかの台所道具がある。農具については既述したように児童たちに理解を求めるにはかなり難解なところがあるが、台所は、昔も現在もあるわけで、井戸・水瓶・竈・しちりんといった現在では見られなくなった施設や道具であっても、現在の電化製品、ガス器具、水道への生活用具の変遷を学習すればあるていど理解できるものと考え。もちろん、数ある資料の中からどれを選択するかという行為には、学芸員の豊富な知識と経験が求められる。しかし、学習内容については、とうてい博物館側だけでは至らず、実際に教育現場で学習指導している教師の意見や考えを聞くことが民具活用を進めていくうえで不可欠である。学校側が求めているものを把握し、児童たちの素朴な疑問に応えるべく、博物館学芸員は、専門的な知識をどう生かすかが民具活用を通しての博学連携につながるものと考え。

引用・参考文献

- ・岡田清一「平成20年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）博物館・学校連携シンポジウム パネルディスカッション⑤「すがたをかえる大豆」体験学習成果報告書」『八尾市立歴史民俗資料館 研究紀要』第20号、2009年、110 - 151頁。
- ・岡田清一「八尾の桶作りと道具について - 底抜け担桶の復原製作から -」『八尾市立歴史民俗資料館 研究紀要』第24号、2012年、25 - 32頁。

※挿入写真については、すべて八尾市立歴史民俗資料館が撮影したものである。